

よりよき「音」の造り手達へ

for Better Sound Creators

世の中には、さまざまな音の「造り手」がいる。音を造り出すものを造る「造り手」＝「楽器職人」がいて、その創造物を使って音を出す「造り手」＝「音楽家」がいる。そこには「プロ」と「アマ」という世間的な垣根は存在しない。ただ純粹に「よりよき音」への奉仕の精神があるだけだ。しばらく前に、「よりよき音」を求めて、単身欧州に渡り、音造りの冒険に身を投じた若者がいた。時を経て若者は成長し、今新たなブランドの旗印をかかげて、凱旋しようとしている。

その名は

Brass Sound Creation

その若者の名は、Tomomi Kato氏。ロータリートランペットが「国産」となっているかのようなドイツにあって、単身楽器造りの工房を設立し、国柄に逆らうかのようにピストン式のトランペットにこだわりつづけている男だ。

氏は高校の管弦楽団部でトランペットと出会い、楽器人生を急角度で「音造り」の方向へハンドルを切った。トランペットが、氏の中にひそんでいたクラフトマン魂に火をつけたのである。「管楽器の本場はドイツ。ドイツ

に行って楽器造りを学びたい!」、そう考えた氏はまずドイツ語の習得にかかった。そして、運良く当時のベルリンフィル首席、コンラディン・グロート氏と会う機会を得たのであった。

グロート氏のツテを辿って紹介されたマイスター、ハンス・シュナイダー氏に弟子入りした氏は、ネジの一つまで自家製にこだわる中世以来の伝統的家内制手作業

を続ける工房で、一から、いや、ゼロから金管楽器製作の基礎を学んだ。またそこでは楽器製作以外に、日本では手にできない古い欧州独特の楽器の修理や調整にも携わった。1990年には見事マイスター試験に合格。そ



■TR-501G (上)

■TR-105S (下)「ミレニアム」



ベルとマウスパイプをとめる「延べ座」の有無は、それぞれの楽器の「性格」によって決められている。右のTR-501Gにはベル先端方向の「延べ座」がなく、左のTR-105Sにはそれが備わっているのが一目瞭然

<問い合わせ先>

日本総輸入元 有限会社 セレクト インターナショナル 〒272-0836 市川市 北国分 1-8-2
TEL : 047-374-0792 FAX : 047-372-2704 e-mail : info@select-inter.com
URL : <http://www.select-inter.com>



鳴き止め（背骨状の金属がクルークに装着されている）の施されたチューニングスライド。
また、チューニングスライドと本体の支柱の配置はとてもユニークだ

の後はドイツ、スイスの工房を渡り歩き、最新の音響物理学と、かねてから考えていた「ピストンヴァルヴ」の研究に時間を費やした。やがて古都トリアーにあるクリューガーの工房長に就任。氏のデザイン・技術力が評判を呼び、氏を名指して業務提

携の依頼が相次ぐようになる。それを契機に1995年にフリーのデザイナーとして独立。ドイツに隣接する風光明媚な小国、ルクセンブルグに独自のブランド“Brass Sound Creation”が産声を上げたのである。

「異邦人」だからこそ 発想できた

ロータリーの国のピストン楽器

欧州ではピストンよりもロータリータイプの、水平方向の回転で管長を切り替える装置の開発が盛んだった。しかしながらBSCは敢えてピストンを採用。その考えの基には、明確な「音色」への意志があった。

「ピストンとロータリーの根本的な性質の違いは演奏の際、音の中心を使うか外側の輪郭を使うかといったところにあります。ロータリー式の音色は「人の歌声」のように「音の中心」でメロディーを奏でるのに対し、ピストン式の音色は「音の輪郭」が明確になります。(Tomomi Kato)。その両方を併せ持つ楽器を造る。欧州でも

アメリカでもない、日本という特異な「文化圏」に育った氏ならではの発想。

本来、音は「中心」も「周縁」も同様に大切なもの。どちらか一方だけをとりざたするのは本末転倒であるのはいうまでもない。「音の中心が散らず」、「倍音が明確に鳴る」楽器、それこそがアンサンブルの中で自分を活かし、さらに他人をも活かす楽器となるはず。楽器の本場にいる「異邦人」だからこそできる発想が、BSCのエネルギー源となる。

温かく柔軟性のある音色を目指し、Tomomi Kato氏の、そしてBSCの挑戦は今日も続いている。

【我らBrass Sound Cats】 Vol.01



「BSCの音色は仲間も認めてくれました」（「いもぼんど」練習場にて）

バンドをドライブしようとする意欲的な喇叭吹き には、ぴったりですね（高橋守之さん）

「Cats」とは、ジャズマンを示すスラング。Brass Sound Creationの楽器を愛用しているCATSを紹介するこのコーナー。まずトッパッターは「マンディナイト・ジャズ・オーケストラ」で活躍するリードトランペッター、高橋守之氏。千葉県松戸市に生まれて中学よりトランペットに親しみ、県立国府台高校でジャズを、中央大学でビッグバンドを経験。卒業後も、大企業の部長職をつとめながら毎週月曜の「マンディナイト〜」（名前が凄いがギルのバンドとは無関係）の練習の他、毎週日曜の朝にはもうひとつのビッグバンド「いもぼんど」（こちらも意味名前が凄いが）の練習に積極的に参加している。スーパーサラリーマンだ。ご自宅には地下室を用意し毎日頃から鍛錬を重ねているというから凄いな（というか、うらやましい!!）。さらに出張も多いのだが、定宿にも楽器を常備し、出張中も練習を怠ることはない。そんな高橋氏は最近BSC（TR-1055ミレニアム）を入手し鳴らしこみの真っ最中だ。「今まで使ってきた楽器も、お店でいろいろ試して選んだんですが、リード専用の音の軽やかな楽器ばかり揃えてしまっていたので、もう少ししっかりした楽器が欲しいな、と思っていたところにし出会ったのがBSCだったんです」

ビッグバンドのリード吹きは、アマチュアだろうとプロだろうと「激務」であることは間違いない。ハイノートが楽に鳴ることも必要だが、中音域をたっぷり鳴らせる能力も外せない。「この楽器は、その両方を満たしてくれる、頼もしい相棒です。値段も手ごろだし、造りもしっかりしています。音程がいい、というのもありがたい。高い方を吹いている

時にはいろいろ気にしなきゃいけないことが沢山あるので、非常に助かりますね。ピストンの具合もいいし、ビッグバンドのリードにはバッチリですね」高橋氏の持論は「ビッグバンドの喇叭はアンサンブルで鍛えられる」というもの。「社会人バンドでリードを吹こう、というくらいの人なら、たいしては2つか3つのバンドを掛け持ちしているものです。そうじゃないと保たないんだよなあ(笑)2つも3つも掛け持ちしたら疲れて「保たなく」なるのでは、と聞くと、「リードの練習は合奏でしか出来ないんです。バンドをゴキゲンにドライブしようとしたら、喇叭の音色をみんなまで練り上げなければならないんだから」だから新しい楽器を持ち込んでも、時には仲間からNGを出されることもあるという。しかし高橋氏の新しいBSCは、どちらのバンドのメンバーにもすんなり受け入れられた。BSCが参戦してからの、これからの両バンドの「練り上げ」が楽しみだ。

【高橋氏のBSCが聴ける場所】

「いもぼんどコンサート」

<http://imoband2005.hp.infoseek.co.jp/>
10月22日

千葉県立現代産業科学館にて 2時間演
入場無料

「マンディナイト・ジャズオーケストラ 第33回定期演奏会」

<http://home3.highway.ne.jp/monday/home-jp.html>

11月25日

東京都港区「新橋ヤクルトホール」